

## その 54

### 万葉、最後の旅へ（その 2）



翌朝再び明日香村を訪れた。言うまでもなく、明日香には飛鳥時代の都飛鳥宮跡をはじめ数え切れないほどの歴史的名所旧跡があるが、私が車でまず目指したのは、「雷<sup>いかづち</sup>交差点」である（上の写真）。この交差点を挟んで 2 つの由緒ある丘があるからだった。その 1 つは、「雷<sup>いかづちのおか</sup>丘」で、天皇が雷丘に出でます時に、柿本人麻呂が作った歌、「大君は 神にしませば 天雲の 雷の上に 庵りせるかも」（巻 3・0235）で知られる丘である。その雷丘は、雷交差点に接してすぐの所にあった。それが、噂には聞いていたが、丘というよりちよとした雑木林としか見えない小さな丘だった。雷丘を「天雲の雷の上に庵りせる」と表現されるスケールに比べ、実際は小さな丘であることを捉えて古来様々な議論があるが、1 説にはその丘は、実は「甘櫨<sup>あまかしのおか</sup>丘」ではなかったか、という説まである。目指した 2 つの丘のもう 1 つがこの「甘櫨丘」で、そのすぐ南に雷丘とは対照的に大きな丘が広がっていた。来る途中にも甘櫨丘展望台への上り口が 2, 3 か所あることに気づいていた。大化の改新以前は、この丘の麓に蘇我蝦夷と入鹿の親子がその権勢を示す邸宅を構えていたとされている。万葉集にはこの丘を詠った歌はないことから、雷丘の歌は甘櫨丘だったのでは、という説が出る所以でもある。

車を駐車場に入れて丘を登り始めた。梅雨の晴れ間の炎天下、咲き残った青い紫陽花の坂道を汗をかきながら歩くこと約 20 分、ちよとした台地になった丘の頂上展望台だった。それまで木立に覆われていた眺望が一気に開け檜原の地が一望できた。初めて見る景色だったが、平野に点在する 3 つの小山が、左から畝傍山、耳成山、香具山の和和三山であることが分かった。香具山の麓にはこれから立ち寄る予定の藤原宮跡もあるはずだ。先に書いたように、万葉集にはこの丘から詠った歌はないが、いかにも天皇が丘に登り国見して詠った大和の国の光景を思い起こさせる眺めだった。



甘櫨丘展望台

そして、展望台の反対側、つまり、甘樫丘の東側を見ると、わずかに視界が開けていて眼下に明日香村の一部が見えた。飛鳥大仏で知られるわが国最初の仏教寺院、飛鳥寺と思しき寺院が見える。この寺は平城遷都に伴い奈良の地に移され、新たに「元興寺」として建立されたことから、以後は本元興寺とも呼ばれているという（ちなみに、この「元興寺」という古寺の名をテークノートしておいてほしい）。その右手には、前日訪れた奈良万葉文化館では、と思われる建物の一部が見えるが、それかどうかは確認できない。視界が遮られていなければ、さらにその右手に、中大兄皇子や中臣鎌足らによる蘇我入鹿暗殺事件、いわゆる乙巳<sup>いっし</sup>の変が起こった飛鳥宮跡や聖徳太子誕生の地とされる橘寺など、飛鳥京一帯が見えるはずだが、残念ながら、この展望台からはその全貌を見ることはできなかった。

飛鳥京の後には、その次の都藤原宮跡に向かった。

広大な藤原宮跡には写真で見慣れた赤い基壇が立つ大極殿跡が残っている。中国の都城にならば、日本で初めて建設された本格的都城で、最近の調査研究によると、平城京や平安京を上回る規模だったとも考えられている、という藤原宮跡資料室のボランティアの方の説明を聞き、その広大さに納得した。資料室のある奈良文化財研究所のすぐ裏手に大和三山の1つ、天の香具山が迫っ



藤原宮大極殿跡（背後の山は天の香具山）

ていた。古来「天」という呼称をつけて呼ばれるほどに神聖な山がすぐ目の前にあった。先に甘樫丘の展望台から藤原京一帯を眺めわたした時、「国見」した気分、と書いたが、舒明天皇が国見をして詠ったのは、この天の香具山からだった。その長歌が、万葉集の2番歌である。

「大和には 群山あれど とりよるふ 天の香具山 登り立ち 国見をすれば 国原は 煙立ち立つ  
海原は 鷗立ち立つ うまし国ぞ 蜻蛉島 大和の国は」 舒明天皇（巻1・2）

そして、同じ巻1の28番歌は、あのよく知られた天の香具山の歌である。

「春過ぎて 夏来るらし 白たえの 衣干したり 天の香具山」 持統天皇（巻1・28）

持統天皇が藤原宮から香具山を見て詠んだ歌だ。しかし、この「天の香具山に白い衣が干してある」というごく一般的な訳を読むと、「神聖な香具山にそんなに衣を干すだろうか？」という素朴な疑問が湧いてくる。それに対しては、いくつか説があって、「干した白い衣の向こうに香具山が見える」とか、「持統天皇は香具山を見て詠んだのではなく、香具山から見て詠んだのだ」、という解釈もあるから面白い。つまり、香具山から「国見」をして、民の白い洗濯物が干されていて、国は穏やかだなあ、と詠んだのだらうという。とすると、舒明天皇が国原に飯を炊く煙を見、持統天皇は干されている洗濯物を見て詠った、同じ国見の歌と言えるのかもしれない。いずれにしても、この藤原京はわずか16年で廃都となる。

藤原宮跡からしばらく車を走らせると、思わず「おお！」と声が漏れそうなほど巨大な鳥居が見えてきた。それが、次の目的地日本最古の神社と言われる<sup>おおみわ</sup>大神神社の入口、「一の鳥居」か、と思いきや、「一の鳥居」は今の参道から外れた別の所にあるという。

この大鳥居は昭和 61 年に建立されその高さは 32.2 メートル、耐久年数 1300 年というから、「一」は「一」にしても、「日本一の鳥居」ではある。



大神神社には、この大鳥居の他に一の鳥居など 3 つの鳥居があるが、本殿はなく、ご神体は拝殿の背後にある三輪山そのものである。拝殿から三ツ鳥居を通して山に向かって拝む。私も拝殿の前に立ち形通り手を合わせて合掌したが、拝殿の脇の三輪山が直接見える所で、人々がご神体の山に向かって手の平をかざして祈っているのに気がついた。大神神社は日本有数のパワースポットとして知られていることもあり、「ご神体の三輪山からパワーをもらっているのか？」と、祈っている人に聞いてみたところ、「いいえ、私は三輪山の神様にお礼しているのですが」とか、「みんながそうしているので真似して」とか、どうもはっきりしない。そこで社務所の巫女さんにも聞いてみた。「参拝の仕方は参拝される方の自由にお任せしておりますので、私たちには分かりません」と、これまた、はっきり答えてはくれない。それでは、神社で一番偉い宮司さんに聞かれない、とインタビューを申し入れよう……というのは冗談で、「日めくり万葉集」では、実際大神神社宮司の鈴木寛治氏にインタビューをしている。それを紹介させてもらう。

万葉集には、確かにこの三輪山を詠っているとされる歌が 5 首あるが、鈴木宮司は額田王の歌について語ってくれた。667 年、飛鳥から近江へ都が遷される時額田王が住み慣れた大和への惜別の情を詠んだ長歌と反歌である。

「味酒<sup>うまさけ</sup> 三輪の山 あをによし 奈良の山の 山のまに い隠るまで 道の隈<sup>くま</sup> い積もるまでに つばらにも 見つつ行かむを しばしばも 見<sup>み</sup>放<sup>はな</sup>けむ山を 心なく 雲の 隠さふべしや」 額田王 (巻 1・17)

(三輪の山は奈良山のむこうに隠れてしまうまで道の曲がりか幾重にも重なるくらい、いつまでも見ながら行きたい山なのに、何度も見たい山なのに、これほど情け容赦なく雲が隠してよいものか)

「三輪山を 然も隠すか 雲だにも 心あらなも 隠さふべしや」 額田王 (巻 1・18)

(それほどまでに三輪山を隠すか、せめて雲だけは情け深くいてほしい、隠してなんか欲しくない)

鈴木宮司は、三輪山には日本人の信仰の原点があるという。

「私どもにはお山をはじめ一木一草すべてに魂が宿っているという認識があります。共存共栄といいますが、人間も木も草も全部一体だという信仰がある。その原点となるのが三輪山です。『日本の神様は信ずるものではなく感ずるものだ』という言い方をします。三輪山に靈気を感じてお祀りする。ここに来て摩訶不思議な、よそとは違う空気を感じていただく。それはお山から吹く清々しい風であったり、目に見えない力だったりします。これらが三輪山を皆さん方が参拝する魅力になっていると思います」。

あらゆる土地に神が宿ると考えていた万葉人。新しい土地に移る時には住み慣れた土地の神に別れの言葉を捧げ、新しい土地での暮らしの無事を祈ったという。額田王は飛鳥を去るにあたって、大和を代表する神の山である三輪山にこの歌を捧げたのである。

大神神社がある桜井市から天理市を通り奈良市に通じる山<sup>やまのへ</sup>辺の道は、わが国最古の古道とされている。その名の通り奈良盆地の山裾を縫うように走る古道は、1人、2人がやっと通れるほどの道幅で、道沿いには「記紀」や「万葉集」ゆかりの地名、史跡が数多残り、木々に覆われた古道を歩くと古代ロマンの世界に誘われるような思いがする。奈良までは約26キロ、



天理までも約16キロ、歩くと1日がかりの行程になるので無理。せめて2、3キロほどは古代ロマンの世界に浸りたいと歩き始めて20～30分、耳元をブーンと音を立てて何か飛んで行った気がした。よく見ると大きな蜂だ。前方を2匹の蜂が飛び回っている。一瞬すぎる娘のすぎる蜂を思い出したが（本稿：その11「上総国の蜂娘子」）、それがスズメバチでもし刺されたらと思うと、即、踵を返した。きっと三輪山のご神体が「これ以上行くこともないよ」、と使者を遣わしてくれたのだろう。大神神社まで引き返して、手の平をかざすスタイルで三輪山に再度拝礼。その後車で国道を山辺の道に沿って北上、奈良市に入った。

NHKに勤務していた現役時代は番組の取材で何回か訪れるなど、奈良市とは縁が深い。年に1度だけ一般公開される正倉院展も、かつて「日曜美術館」を担当した時1度取材しており、9000件にも及ぶ御物のごく1部だけ、毎年数10点の展覧にもかかわらず、文字通り、天平文化の宝庫という思いに打たれたものだった。しかしその時は、正倉院が、古代の「物のタイムカプセル」だとしたら、万葉集は、「言のタイムカプセル」だったことは知る由もなかった。万葉集には、正倉院に御物を残した聖武天皇の歌が12首、光明皇后の歌3首が残されているが、それらを紹介する紙幅はない。

ところで、奈良の関係で最も思い出深いのは、1988年の「なら・シルクロード博」だ。そのイベントの思い出が、20年後の「日めくり万葉集」につながったこともあり、その経緯を記す。

シルクロードというと、1980年、NHKの取材班が外国のメディアとして初めて中国のシルクロード領内に入って、日中共同で制作したNHK特集「シルクロード」第1部「絲綢之路」が世界的な反響を呼んだ。そして、1983年、中央アジアからローマに至る「シルクロード」第2部「ローマへの道」が放送され、世界的なシルクロード・ブームにさらに火がつく。そして、1988年、ローマから海上の道をたどって、シルクロードの出発点中国の西安に戻るという「シルクロード」第3部「海のシルクロード」の放送が企画された。その関連で、NHKからシルクロードの終着駅ともいべき奈良に、ある事業企画が持ち込まれた。それが実現したのが「なら・シルクロード博覧会」だった。奈良県、奈良市、NHKの3者共催で、1988年4月から10月までの間開かれた「なら・

シルクロード博」は人気を呼び 680 万人を超える観客を集め、その後の地方博覧会の先駆けとなった。

シルクロード博開会の翌日から放送が始まった NHK 特集「海のシルクロード」の統括プロデューサーを務めたのが他ならぬ私だった。第 1 回「海底からの出発」の放送で、シルクロード取材班がシリア沖地中海で発見したワインやオリーブオイルを入れて運んだアンフォラの壺と沈没船の水中発掘から、「海のシルクロード」の旅は始まった。そして、シルクロード博は、そのメイン会場に、発掘したアンフォラの山と沈没船をそのまま復元展示する「海のシルクロード館」を設けたのである。アンフォラの水中発掘は、日本が初めて海外で行う水中遺跡の発掘調査で 3 年がかりの大事業だった。シリアとの共同事業だったこともあり、お国の事情も違い水中発掘は難航した。その他撮影上のトラブル等の対応のため、現在では入国さえ難しいシリアに、急遽私も入国、1 か月滞在し発掘と取材に一区切りをつけることができた。その大事なアンフォラの展示である。番組の制作と海のシルクロード館開設のため、東京と奈良を行き来もした。

すべて準備が整い、シルクロード博の開会の日が来た。オープニング・イベントの開会式は、NHK グループの担当である。私はシルクロード博のテーマソングのパートを受け持ち、出演者などの対応にあたることになった。歌手は、あの大物演歌歌手島倉千代子さんである。歌は、「夢・浪漫・NARA」。作詞が東海林良氏、作曲は姫神こと星吉昭氏。東海林氏は、ショーケンや柳ジョージなどロック系や現在リバイバル・ヒットして話題となっている渡辺真知子「唇



なら・シルクロード博「海のシルクロード館」

よ、熱く君を語れ」等の作詞家。姫神は、岩手の姫神山の麓で作曲活動に取り組み、「海のシルクロード」の前に担当した「ぐるっと海道 3 万キロ」のテーマ音楽を作曲してもらっていたので、彼の岩手のスタジオに訪ねたこともあったが、この日は会場には来られなかった。島倉さんとは初対面、東海林氏とも仕事として付き合うのは初めてだった。子供たち 50 人のバックコーラスとのリハーサルも終わり、開会式本番までは約 3 時間、段取りの確認が終わっても時間が大分あるので、お 2 人をシルクロード博の会場に案内することにした。その時急に別件の対応で呼び出され、私はお詫びして会場の見学は 2 人に任せ、そこを離れた。本番の 30 分前、2 人が戻ってきて、「面白かった」と言ってくれたので一安心。さらに東海林氏から、「会場で写真週刊誌から取材を受けたが、適当に受け流しておいたよ」と聞いて、島倉さんクラスになると、そんなこともあるだろう、シルクロード博と「海のシルクロード」番組のいい PR になると、私も、取材の話は受け流しておいた。それから 1 週間後、東海林氏から電話が入った。「写真週刊誌『フラッシュ』の今週号を見てくれ」。早速書店に駆け込んでページを繰ってみると、島倉さんと東海林氏の 2 ショットの写真があった。写真より先に目に飛び込んできたのが、見出しの「島倉千代子さんの『若いツバメ』！」だった。かつては、ロックの歌詞を書いていた東海林氏は長髪でオシャレ、格好いい。記事もいかにもありそう、という感じで困ったのだが、東海林氏は電話口の向こうで「光栄なこと」とニヤニヤしている様子だ。その後改めて奥さまに電話し、「事実ではありませんのでご心配なく」

と事情を説明、お詫びして一件落着となった。ただ、それがきっかけでお2人は親しくなると、後日聞いて「瓢箪から駒」、ということもあるので、安心したりご心配したり(?)。そんな島倉さんも鬼籍に入られたが、東海林氏とはそれ以来付き合いは深い。

そんな奈良の出来事を思い出して、「日めくり万葉集」の選者選びの時、奈良や万葉集大好きという東海林氏に問うてみた。

「万葉集の中で好きな歌はある?」、「あるよ」、「誰の歌?」、「紀郎女」、「キノイラツメ……?」。不覚にもその時はまだ私はその名前を知らなかった。

「万葉集は相聞歌や恋歌が多いよね」、「3分の1以上が相聞歌で、確かに多い」、「その恋歌の中で一番官能的な歌だと思うよ」、「何の歌?」、「ネムの花の歌」、「……眠れ、眠れ……あの子守歌のネムの歌?それがなんで官能的?」、「ネムって、漢字でどう書く?眠いのネムではないよ」、「……」、「合歡、歡びを合わせる、と書くだろが……つまり、男女交合、共寝を誘う歌だよ」。

いい歌を選んでくれたと思った。その後それが「日めくり万葉集」になり、また東海林良作詞、クラシック音楽の指揮者大友直人氏作曲、シャンソン歌手のクミコさんの歌という異色の組み合わせによるCD「合歡の孤悲」となる。

ところがそのクミコさんは、2011年3月11日の東日本大震災を石巻市民会館でコンサートのリハーサル中被災する。命からがら裏山の高台に逃げ、どうにか翌々日の13日夜東京に帰り着くことができた、と聞いて安心した。実は、この13日には、「合歡の孤悲」の録音の予定が入っていたのだが、もちろん中止にしていた。クミコさんが受けたショックを考え、「そんな時に恋の歌など……」と慮り、ラジオ深夜便で放送の予定もあったが、歌の収録そのものを中止することを検討した。それを耳にしたクミコさんは、「こんな時だからこそ、『恋歌』を歌いたい。被災者の皆さんのためにも歌わなければならない」と言う。その通りだった。急遽スタジオを押え無事録音することができたが、スタジオ入りした時は憔悴きっていたクミコさんが、マイクの前に立った途端人が変わったようにいつものクミコさんに戻り、張りのある美しい低音で歌い出したのを聞いて、副調整室にいた作曲の大友氏が大きく頷いたのが印象的だった。クミコさんの「合歡の孤悲」は、その後、「ラジオ深夜便の歌」として、3か月間毎晩放送されとても好評だった。(本稿:その9「2011年3月の『合歡の孤悲』」)

奈良とのこれまでの縁について書いているが、中でも「日めくり万葉集」の思い出は、とりわけ印象深い。というのは、奈良でも最も由緒ある2つの寺の住職に、私自身インタビューしている。お2人とも万葉集中重要な歌を2首ずつ取り上げ語ってくれたのだが、それぞれその内の1首は、その寺の住職でなければ語ることができない貴重な話を披露してくれた。当時の法隆寺の大野玄妙管長と薬師寺の安田暎胤管主である(ともに肩書は当時のもの)。

言うまでもなく、法隆寺は聖徳太子創建の歴史ある寺院で、その129世住職にあたる大野管長が選んでくれた2首の内の1首は、万葉集にただ1首、聖徳太子が詠まれたとされる歌だった。歌の題詞には、「挽歌」として、次のように書かれている。

「上宮聖徳皇子、竹原井に出遊でます時に、龍田山の死人を見て悲傷して作らず御歌 1 首」。

「家にあらば 妹が手まかむ 草枕 旅に臥やせる この旅人あはれ」 聖徳太子（巻 3・415）

（家にいたならば、妻の手を枕にするだろうに、草枕旅先で倒れているこの旅人は、ああ、いたわしい）

大野管長の解説は、「太子さまが日頃から人々に大変優しく慈悲深い人柄であったことがうかがえる歌です」の一言にとどめて、次の歌に移る。

大野管長は、次の歌についてインタビューする前に、法隆寺境内の一般立ち入り禁止の一角に、私たちスタッフを招き入れてくれた。

「斑鳩を直接詠った歌は 1 首しかないのですが、この歌に詠まれた池がどこにあったのか、研究者の間でも謎になっているようです。ところが、法隆寺の中に<sup>よるか</sup>因可の池として語り継がれている池があるのですよ」と言って、小さな池に案内してくれた。そこには、「ヨルカの池」という看板が立てられていた。次の歌である。

「斑鳩の<sup>いかるが</sup> 因可<sup>よるか</sup>の池の<sup>よる</sup> 宜しくも 君を言はねば 思ひそ我がする」 作者未詳（巻 12・3020）

（斑鳩の因可の池の名前のように、「<sup>よ</sup>淑き人、<sup>よ</sup>好し人」と、誰もあなたのことを言わないので、私は気をもんでいます）

3 歳から法隆寺に住み込んだという大野管長はインタビューの中ではこう答えてくれた。

「法隆寺に聖徳会館という大きな建物があり、その南側に低い湿地帯があります。私たちが子どもの頃には水が溜まったりして、その辺りが因可の池の跡と言われていました。太子さまがお住まいになっていた斑鳩の宮とこの法隆寺とのちょうど中間あたりの南側という、いかにもという場所にあたります。因可の池は斑鳩のこの地域の人々を大変潤し、また人々が頼りにしていた池であったと思われます。ですから、人々はこの池のことを良く言います。けれど誰もあなたのことを良く言わない。それでも私はあなたを好きなんですと気遣う気持ちがよく表れていますね。その心情には好感が持てます。当時の人々の素朴さがよく表れていて微笑ましく感じます」。

子どもの頃から遊んでいた大野管長でなければ語りることができなかった因可の池だが、この池の所在については、万葉集研究の上ではちょっとしたスcoopとなり、この池の映像は初めての公開となった。

上の歌の訳で、普通は「良い人、好ましい人」と書くべきところを、あえて「<sup>よ</sup>淑き人、<sup>よ</sup>好し人」と書いたが、それは、次の歌との関連からである。

薬師寺安田管主が、「日めくり万葉集」で選んだ 2 首の中の 1 首は、よく知られた次の歌である。

「<sup>よ</sup>淑き人の <sup>よ</sup> 良しと <sup>よ</sup> 吉く見て <sup>よ</sup> 好しと言ひし <sup>よ</sup> 芳野 <sup>よ</sup> 吉く見よ <sup>よ</sup> 良き人 <sup>よ</sup> 四来三」 天武天皇（巻 1・27）

（昔のよいひとが、よいところだとよく見てよいと言った。この吉野をよく見なさい。今のよい人よ、よく見なさい）

薬師寺は、この 1 つの歌に「よき(し)」を 8 回も詠み込んだユニークな歌を詠んだ天武天皇が発願し、その皇后だった持統天皇が建立したもののだが、安田管主は、「寺にある 2 つの塔の内、東の塔は天武天皇、西

の塔は持統天皇か、いずれにしてもこの良き 2 人の夫婦愛が結晶した寺ではないか」と言う。

この歌も、安田管主の話はこの一言にとどめて、次の歌に移らなければならない。というのは、万葉集 4516 首の内 1 首しかない歌がこの薬師寺と関係しているからである。次の歌である。

「<sup>いやひこ</sup>弥彦 <sup>けふ</sup>神の麓に 今日らもか <sup>かほごろも</sup>鹿の伏すらむ  
皮膚着て <sup>つの</sup>角つきながら」

作者未詳（巻 16・3884）

（いやひこの神の山の麓に、今日あたりも、きっと神の鹿が腹ばいになっているだろうよ。毛皮の服を着て角を付けたままで）

万葉集には 1 首しかない仏足石歌である。仏足石歌について、安田管主は言う。

「短歌は 31 文字ですが、この歌は 38 文字ある本当に珍しい歌の 1 つです」。

仏足石歌とは、短歌の 5 7 5 7 7 に 7 音 1 句を加えた歌体の歌のこと。薬師寺にある日本最古の仏の足跡を彫った石、仏足石の傍らに歌碑が建てられ、そこに 21 首の仏足石歌体の歌が、万葉仮名で刻まれている。安田管主は、その内の 1 首を好きだと言う。

「この御足跡を <sup>みあと</sup>訪ね求めて <sup>よ</sup>善き人の <sup>いま</sup>在す国には  
我も参てむ <sup>まい</sup>諸々を <sup>み</sup>率て」

（ここに残された足跡を追い求めて、み仏のいます国に、私も参りたいのです。たくさんの人々を引き連れまして）

「お釈迦様の世界に皆と一緒にについて行きたい、憧れの浄土に往生したいという素朴な願いが詠われたのではないのでしょうか。御足跡というのは、お釈迦様の足跡と聖地の両方を意味しているのではと思います」、と安田管主は言う。



万葉秀歌を通して聖徳太子の慈愛について語った今はなき法隆寺大野管長。そして、天武、持統天皇の夫婦愛について語ってくれた薬師寺安田管主。両師の優しい眼差しと穏やかな人柄が今も心に残っている。滅多に立ち入る機会がない由緒ある寺での高僧インタビューだったが、なんとも役得と言う他ない奈良の思い出である。

これまでの奈良と万葉集の思い出を書いてきたが、今回は再び最後の「万葉の旅」に戻って、そろそろ、「万葉～古から今へ」、略称「万葉集ナウ」そのものを終えることにしよう。 （続く）